

# 授業の活性化に向けて

—グループによる学生参加型授業の実践的考察

## Toward More Active Classroom Interaction

—A Consideration of Implementing Learner-centered Group Work in Class

高橋 寿夫

TAKAHASHI Toshio

All teachers desire to make their teaching in class more dynamic, and this is especially true of educators who are involved in teaching less-motivated college students differing widely with regard to degree of academic ability.

There is a great need for dynamic teaching methods that will energize and motivate students to participate positively in their own learning. In other words, some ingenious teaching methods should be implemented to stimulate students' intellectual curiosity, and enhance their learning motivation.

The purpose of this paper is to introduce "group learning" in a reading class after reviewing its various features as identified in preceding studies, and to verify how effective it can be for dynamic classroom teaching, helping students share a relaxed atmosphere, and encouraging them to cooperate with one another in finding solutions to their problems.

### キーワード

授業の活性化、学生参加型授業、グループによる学習

## 1. はじめに

「授業を活性化したい」とは教鞭を取る者であれば誰しも切に願うところである。特に、「大学全入時代」の到来により、学力の底辺拡大化、学習意欲の低下、目的意識の多様化など、過去に例を見ない急激な変化にとまどいを感じている大学教員にとってはなおさらのことである。学力、学習意欲、目的意識に大きく差異があり、しかも多人数（40～50人）の学生からなるクラスにおいて、果たして「活性化した授業」など望めるのであろうか。確かに、歌を歌ったり、ゲームをするなど、娯楽的要素の強い活動を取り入れれば、一時的に授業が活性化した（？）雰囲気をかもしだすことは可能であろうが、授業の導入部に使っても授業の本筋を担える活動とはなり得ない。第一、歌やゲームなどの学習活動が最高学府である大学の授業で行わ

れること自体に違和感を覚えるかもしれない。

授業の活性化は教員だけでできるものではない。いくら教材研究に時間を費やし、内容の充実した授業をお膳立てしても、講義調の一方通行的な授業展開では授業の活性化は望めない。つまり、いかに有益な講義であっても学生側に学び取ろうとする「学び」の意欲がなければ、教員の言葉は虚ろに響くだけであって、授業が盛り上がり、活性化することは期待できない。漫然と受け身で聞いているだけの学生から知的好奇心を呼び起こし、「学び」への意欲を高める工夫が授業の活性化には欠かせないのである。

本稿では、実践的研究の対象としてきた「グループによる学習」の持つ特質を先行研究と照らし合わせながら、再度洗い直し、その理論とするところが実際の授業に確かに当てはまるのかを検証し、グループによる学生参加型の授業が学習意欲を高め、授業の活性化に好ましい授業活動であるのかどうかを考察する。

## 2. 授業への参加意識を強める

授業が盛り上がり、活性化するには、学習者の学ぼうとする意欲が必要である。学習意欲を育てるには、学生の授業に対する受身的・消極的な姿勢を改めることから始めねばならない。それには学生に授業とはけっして他人事ではなく、自分たちで作っていくものであるという認識を抱かせ、授業への参加意識を強めることである。例えば、理科の実験、社会の班別研究発表、体育のボールゲームなどにおけるように、学習者相互の関わり合いを深め、多方向型の授業展開を目論めば、学習者の授業への参加意識は強まり、おのずから授業は活性化する。このような活動に見られる共通因子として「グループによる学習」が考えられる。

## 3. 「グループによる学習」とは

「グループによる学習」とは、学習形態の一つで、学習者が（小さな）グループにおいて行う学習を指し、一般にはグループ学習（Group Learning）と呼ばれ、学習者が能動的に学習に関わる効果があるとされている。なお、他の学習形態には一斉学習、個別学習などがある。

「グループによる学習」については、Cooperative Learning、Peer Teaching (Learning)、Team Learning など（日本では「小集団学習」「バズ学習」「協同学習」など）の名称のもとに、これまで数多くの先行研究があり、枚挙にいとまがないが、その根幹をなす特質は多少の差異は認められても、Davis (1993) の次の言葉にて収斂される。

Students learn best when they are actively involved in the process. Regardless of the subject matter, students working in small groups tend to learn more of what is taught and

retain it longer than when the same content is presented in other instructional formats. Students who work in collaborative groups also appear more satisfied with their classes.

「グループによる学習」は学習者自らの活動として主体化され、学習者相互のやりとりによって一層活発化し、学習内容の定着もよい。また、協同作業を通じて他のメンバーとの一体感が生まれ、互助の精神を育むという社会性も得られ、学習者の満足度は高いとされる。

#### 4. 「グループによる学習」の成否

単に、クラスをいくつかの小グループに分けて、学習者の自主性を尊重し、学習者が自由にグループ活動ができるように仕向けてもうまくいくものではない。Kohn (1986) は次のように述べている。

The students in a group must perceive that they “sink or swim” together, that each member is responsible to and dependent on all the others, and that one cannot succeed unless all in the group succeed. Knowing that peers are relying on you is a powerful motivator for group work.

「グループによる学習」の成否は、グループメンバーの一人ひとりが「浮沈をともにしている」との認識を抱き、責任をもって協力し合い、グループの目標に向かって貢献できるかどうかということにある。言い換えれば、Cooperative Learningの主唱者であるJohnson 兄弟らが重視する「互恵的な相互依存関係」が維持できるかどうかにある。グループメンバーの中に、自分のやるべきことを果たさないで、他のメンバーの努力をあてにし、成果のみを有り難く頂戴するという“ただ乗り”のメンバーがおれば、グループの士気の低下を招き、「グループによる学習」に対する大きなマイナス要因となり、ひいては学習そのものが瓦解しかねない。「グループによる学習」の成功の鍵は“ただ乗り”をするメンバーを作らないことである。

#### 5. 「グループによる学習」の効果

「グループによる学習」による学習効果は、「リラックスした雰囲気楽しく学べる」など幾多の先行研究でほぼ定着化していて、改めて述べる必要もないが、Delaware 大学の発刊になる‘TA Handbook’の中に次のような記述が見られる。

Educators agree that when students work in small groups, they tend to understand the subject matter more thoroughly. Small group work transforms the class into supportive learning teams; the group keeps students energized, motivated and provides support to complete complex tasks.

「グループによる学習」の効果は学習理解を深めることはもとより、学習者はお互いに協力し合って「学び」の意欲を高め、活気づいて学習に取り組むとしている。これはとりもなおさず授業が活性化することを意味している。

## 6. 授業に「グループによる学習」の導入

「グループによる学習」が授業の活性化に効果があると考えられるのであれば、大学英語の授業にもよく採択されてもよさそうであるが、実際はそうでもない。確かに、中・高におけるコミュニケーションの授業では、ペアワーク、スキットパフォーマンス、グループディスカッションなど、“グループによる活動”がよく見られる光景ではあるが、大学英語のコアをなすリーディングやライティングの授業では、馴染みにくいのであろうか、グループを活用した指導法を見聞することはほとんどない。しかし、授業を活性化したら、「グループによる学習」を柱とする学生参加型の授業を行うのに異論のないところである。

## 7. 座席と教室

Johnson (2002) は、グループメンバーの好ましい座席について次のように記載している。

Members of a learning group should sit eye-to-eye, knee-to-knee or in other words, close enough to each other that they can share materials, maintain eye contact with all group members, talk to each other quietly without disrupting the other learning groups. The groups should be arranged that the teacher has a clear access lane to every group.

グループにおける学習活動であるから、こじんまりと机を集めて一つの島を作ることになる。従って、机・イスが可動な教室が好ましい。ただし、机・イスが固定式の教室であっても構成メンバーが4人以下の場合は前の席の者がうしろを向いたり、通路をはさんで向き合ったりしてなんとかディスカッションは可能である。教室については、授業者が容易にグループに近づき、質問を受けたり、活動状況を観察できる通路の確保は欠かせないので、スペースに余裕のある部屋が望ましい。

## 8. グループの編成

「グループによる学習」が行われる“グループ”の編成はどのようにすればよいのか、この学習法の根幹を成すことだけに慎重に進めたい。考慮すべき項目は、グループの構成人数、グループ分けの方法、リーダーの選出と役割、などである。

### (1) グループの構成人数

グループにおいて適切に学習を進めるのに好ましい人数は学習環境によって異なるであろうが、ふつう10人を超えることはない。数が多ければ広く情報が得られ、ディスカッションに深みが増すが、反面、各メンバーの発言量が減り、所属グループへの参加意識や責任感が弱まる。数が少ない場合はちょうどその逆となる。浅野（2002）は「4～5人が好ましいが、6～8人でもなんとかやれる。3人はとてもうまくいくグループができる一方で、一人がはずれたり、一人で請け負ったりする場合のフォローしにくさがある。6名以上になるとグループからはずれる学生が出はじめる。10人を超えるとグループ内グループができるか、ほぼ関与しない学生が出始めるので、それへの対応にも苦慮することになる」と述べている。他方、Jacobs（2002）は、好ましい人数については学習面や運営面からも利点の多い4人を推奨している。

Groups of four have many advantages in terms of both management and learning: Groups larger than four become more difficult for students to manage; The larger the group, the easier it is for one person to hide or be neglected.

グループの構成人数は、学習者間の関わりを密にしながら、かつ、ディスカッションの勢いを失わないことも考慮して4～6名が適切と判断したい。

### (2) グループ編成の方法と頻度

グループ編成には、学籍番号順、友達同士、席が近くの者同士など、多様な決め方があるが、英語学習のグループであれば各メンバーの英語力を考慮した編成でありたい。とりわけ、授業活性化のためにグループ間の競争を企てるのであれば各グループの英語力は均一化していることが望ましく、成績順に按分するのが妥当である。

編成替えの頻度については、Jacobs（2002）は次のように述べて、1学期か半学期に1回としている。

Many teachers have had success in keeping groups together for a term or half a term, a minimum of 5 to 6 weeks. This gives students time to learn how to work with their group

members.

### (3) グループリーダーの選出と役割

グループによる活動には取りまとめ役であるリーダーが必要であり、構成人数が多いほどリーダーの役割は重要である。旧来の考え方では、言語習得を目標とするような学習においてはグループ内の能力差が歴然としており、能力の高いメンバーが能力の低いメンバーに教えるという形態をとるので、リーダーには能力の高いメンバーが選出されるのが好ましいとされてきた。もちろん、これには一理があるので否定されるべきではないが、最近では「協同学習」(Cooperative Learning)などに見られるように、各メンバーの公平な参加責任を重視し、リーダーシップも分け持たれるべきであるとの考えが有力である。この論理を受ければ、リーダーは固定せず、毎回変わるということになる。

## 9. 教材と進度

教材には、まず、話題として学習者の興味・関心を示すもので、分量は導入からまとめまで1回完結のものが好ましい。毎回、新しい話題で活発なディスカッションを引き出すのが狙いである。教材の難易はやや難しめがよい。自主学習では難しいが、グループで話し合うことにより十分な内容理解ができる程度のものを指す。易し過ぎればディスカッションをする必要もなくなってしまう。それゆえに、学習者の学力を正確に把握し、適切な教材選択が求められる。教材選びを間違えると活性化を目指した授業がかえって沈滞化しかねないのである。

## 10. グループ間の競争

教育現場ではあからさまな競争をタブー視する考え方もあるが、競争は学習者に刺激を与え、やる気を起こさせ、授業の活性化にはうってつけの起爆剤となりうる。個人対個人ではなくグループ間の競争であるから人間関係が殺伐となるようなものでもない。学習者はゲーム感覚でこれに対応するであろう。Davis (1993) も “Set up ‘competitions’ among groups.” とグループ間の競争を奨めている。

## 11. 「グループによる学習」の留意点

岡坂 (1991) は「授業者は、グループ学習においていったい何を目標とするのか、明らかにしておかなければならない」としている。授業者の留意すべきことの一つとして、学習者に学習課題と達成目標をしっかりと説明する必要がある。学習者が何をすべきかがはっきりと分かる

ように具体的な教示が大切である。“Explain the assignment clearly and provide a handout.”の表現に言い表されている。毎回、授業者がhandoutを提示するなどして、グループ内でやるべきことを明確にすれば、グループによる学習も活発化する。

## 12. 「グループによる学習」実践事例

「グループによる学習」に関して、先行研究を踏まえ、これまで携わってきた実践研究から得られた経験を加味し、その学習方法と効果を論じてきたが、次に最近の実践事例を紹介する。

### (1) 対象とした授業クラス

英語Ⅱのリーディングを中心としたクラス。(各46名の2クラス)。「グループによる学習」は学習者間の話し合いのなかで学び取っていく学習形態であるので、4技能のうち、どの技能を伸ばすのにも同じように有効とは限らない。やはり内容把握を主眼とするリーディングの授業に向いている。

### (2) 達成目標

大学の提示する共通目標「内容理解に重点を置きながら、パラグラフの構成、論理の展開など、読みに必要な事項を認識しながら、リーディングスキルを養成する」に加えて、「学習者が協同作業を通じて学習意欲を高め、自主的・積極的に問題解決を図ることにより授業が活性化すること」を達成目標とした。

### (3) グループ編成

1グループは4人とした。1グループ6人編成を長年にわたって持続してきたが、リーダーの負担が大きく、4人編成に変えた。その結果、学生間の関わり合いが密になり、学生のグループ活動への参加意欲が昂まり、授業が活性化した印象を得た。

グループ分けには、最初は Proficiency Test を実施、その後は中間・期末試験の結果を利用してグループの英語力が均衡するように成績順に按分した。なお、編成替えは年に4度行った。

グループリーダーは輪番制とし、メンバー全員に公平に割り当てた。1グループ6人編成の折はグループ内で最も英語成績の優れた者を指名したが、最近では1グループ4人編成でリーダーシップも取りやすく、また、学生からの要望もあり、毎回変わることにした。

### (4) テキストと進度

テキストは、「Britain in a Changing World」(成美堂)で、現代イギリスの社会・文化・生活

などに関わる最先端の動向について、イギリス人学者が書き下ろしたエッセイに基づく総合教材 (24 Unit 構成) である。トピックは人物から社会問題まで多岐にわたり、鋭い洞察力で書かれた内容は深みのある読み物となっている。進度は、毎回 (90分授業)、One Unit を完結する。

(5) 授業の展開

- ① 出欠点検とトピックについて概略や背景的知識の説明を行う。(10分)
- ② グループ内における自主的な学習において、1週間前に配布しておいた「GROUP WORK SHEET」の質問とテキスト付着の Exercises についてディスカッションさせ、グループで合意した解答を記入させる。その間、授業者は机間巡視して、各グループの質問などに答える。(40分)
 

なお、「GROUP WORK SHEET」とは、学習者が具体的に何をすべきかを教示した予習プリント (B5版) で、本文の内容理解のための語句の意味、構文、論点について質問が約10問記載され、配点も併記されている。これは「グループによる学習」に欠かせない達成目標の明示にあたるものである。
- ③ 各グループからリーダーの「GROUP WORK SHEET」を提出させ、他のグループリーダーに手渡し、その採点を依頼する。(3分)
- ④ 授業者が質問箇所を押さえながら、語句の意味から論点まで、広範囲に説明を行い、内容理解の定着を図る。この際、授業者は学習者に発問したり、学習者から質問を受けたりしながら解答例を提示する。(30分)
- ⑤ 採点された「GROUP WORK SHEET」を回収・返却し、講評を加えながら結果を公表する。成績のよかったグループのメンバーには平常点として最終評価の折に数点が加味される。最後に、次週に行う Unit の「GROUP WORK SHEET」用紙を配布して終わる。(7分)

13. 「グループによる学習」に対する学習者の評価

学習者に「グループによる学習」について、次のような項目を設けてアンケート形式で尋ねたところ、下記のような結果を得た。回答者総数は92名 (男:56名、女:36名) で、項目(2)と(3)は複数回答である。

表1 「グループによる学習」の可否

(1) リーディングの授業に「グループによる学習」は	回答数	%
a) よい	72	78.3
b) よくない	4	4.3
c) どちらとも言えない	16	17.4



## 授業の活性化に向けて（高橋）

リーディングの授業に「グループによる学習」の導入を「よい」と答えたものが全体の8割に迫り、「どちらとも言えない」を合わせると95%を超え、この学習法が圧倒的多数の学習者によって受け入れられていることがわかる。

表2 「グループによる学習」を「よい」とする理由

(2) a) またはc) と答えた人、その理由は	回答数	%
イ) 従来と違う方法で面白いから	26	13.1
ロ) リラックスした雰囲気楽しく学習できるから	54	27.1
ハ) 話し合ううちに英語（内容）に関する興味を深めるから	1	0.5
ニ) 友達と協調してやれるから	31	15.6
ホ) 友達同士お互いに分からぬ点など聞きやすいから	44	22.1
ヘ) 突っ込んで調べ、深く話し合えるから	12	6.0
ト) 刺激を受けて、よく予習するようになるから	26	13.1
チ) その他（責任感から予習に力が入るから、など）	5	2.5

「グループによる学習」を「よい」とする第一の理由として、「リラックスした雰囲気楽しく学習できるから」を挙げている。数年前にも同じ項目で調査を行ったが、この理由を支持する学習者が最も多かった。「リラックスして楽しく学習できる」学習環境により、学習者は無用の緊張感から解放され、自発的に学習に取り組むことができ、その学習意欲の高まりが授業の活性化を生むのである。

次に高い比率を示した理由は、「友達同士お互いに分からぬ点など聞きやすいから」である。クラス全体での一斉授業では分からぬところや疑問点を授業者に聞きづらいが、小グループの友達同士であれば気安く聞き合うことができ、その活動が授業の活性化を促すのである。

そして、「友達と協調してやれる」と続くが、これは「グループによる学習」の特長の一つで、「社会性の育成」を意味する。協調しなくてはいけないという心構えが積極的に授業への参加をせき立てて、授業の活性化を呼び起こすのである。

表3 「グループによる学習」を「よくない」とする理由

(3) b) またはc) と答えた人、その理由は	回答数	%
イ) 訳読による一斉授業の方が慣れているから	7	22.6
ロ) 友達間の勉強では不安だから	0	0.0
ハ) グループで学習すること自体が好きでなく、なじめないから	3	9.7
ニ) 時間をかける割には能率が上がらないから	9	29.0
ホ) 先生に当てられる心配もなく、さぼるようになるから	10	32.3
ヘ) グループに協調性がなく、覇気に欠けるから	2	6.4
ト) その他	0	0.0

「グループによる学習」を「よくない」とする理由として、「先生に当てられる心配もなく、

さぼるようになるから」が最も多かった。いわゆる“ただ乗り”をする者のことで、授業者が常に気をつけなければならないことである。

次に、「時間をかける割には能率があがらない」が続くが、これはディスカッションがコアをなす「グループによる学習」においてはやむを得ないことである。授業の活性化のためには多少の能率の悪さは看過しなければならないであろう。

表4 予習の頻度について

(4) 「グループによる学習」の予習は	回答数	%
ア) よくする	80	87.0
イ) あまりしない	12	13.0
ウ) まったくしない	0	0.0

あらかじめ用意周到な下調べがなければ、活発なディスカッションは望めず、授業の活性化にはつながらない。「予習をよくする」が8割に到達し、「グループによる学習」が順調に進行していることが推察できる。これには前もって配布の「GROUP WORK SHEET」が役立っていることは言うまでもない。また、グループ内の他のメンバーに迷惑をかけたくないという意識から下調べを入念にすることも考えられる。とにかく、授業者が日頃から予習の大切さを喚起しつづけないと、この数値は落ちるので気をつけたい。

表5 グループ間の競い合いについて

(5) グループ間の競争は	回答数	%
ア) よい	44	47.8
イ) よくない	11	12.0
ウ) どちらとも言えない	37	40.2

先行研究にもあるように、学習にあたって適度な競争は学習者に刺激を与え、やる気を起こさせ、この勢いが授業の活性化につながっている。「どちらとも言えない」が4割もあるのは、グループ間の競争はOKであるが、学習者による採点の不満からも生じているようである。点数で優劣を競う限り、採点は公正に行われなくてはならないが、不慣れな学習者に的確な採点を求めるのは難しい。

#### 14. 学習者のコメント

アンケートに併せて「グループによる学習」を体験した学習者に率直なコメントを書かせた

が、そのうちいくらかを抜粋して、次に紹介する。

- 様々な意見を出し合って答えを見つけていく過程が興味深かった。
- 黙々と勉強するより楽しく勉強できた。
- 自分の意見が認められるととても嬉しかった。
- 予習プリント（GROUP WORK SHEET）が前もって配られたので予習しやすかった。
- グループのメンバーと仲良くなれたのが嬉しかった。
- 競い合うことでよい刺激が得られた。
- グループの人達に迷惑をかけてはいけないのでよく予習をした。
- グループ間の競争でよい成績が残せたので達成感を味わえた。
- 他のメンバーとの連帯感が生まれた。
- グループにどうしてもなじめないメンバーがいた。
- 予習をしてこないメンバーがいて困った。

## 15. おわりに（今後の課題）

リラックスした雰囲気の中で、友達とあれこれ議論しながら、マイペースで問題を協力して解決していく「グループによる学習」はメンバーの学習意欲を高め、全体として授業の活性化を促す学習法である。主として学習者間の学習であるので効率的な指導法とは言い難いが、英語の好き・嫌いや得意・不得意を超えて、学習者一人ひとりが目を輝かしてディスカッションの輪の中で堂々と私見を述べている姿は頼もしく映る。

「グループによる学習」は授業の活性化には効果的な指導法であるが、留意すべき点がある。それは、学力保証の問題である。ただ、学生の積極的な授業参加があり、授業が活気に溢れているだけでは不十分で、併せて、この指導法により学生の学力がよく伸びていることが保証されなくてはならない。数年前、「グループによる学習」の実験群と「一斉学習」の統制群に分けて学力の伸びを調べたところ、前者の方がよかったが、様々な要因が絡んでいることでもあり、1回の比較調査で結論づけるには早過ぎる。さらに時間をかけて多角的にこの命題に取り組んでいくことが今後の課題であると考えている。

### 参考・引用文献

- Center of University of Delaware for Teaching Effectiveness (1996). *TA Handbook* Newark, DE:University of Delaware
- Davis, B. G. (1993). *Tools for Teaching* San Francisco, CA:Bossey-Bass
- Jacobs, G. M., Power, M. A., & Inn, L. W (2002). "The Teacher's Sourcebook Cooperative Learning" Thousand Oaks, CA: Cprwin Press, Inc.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, k. A. (2006). *Active Learning:Cooperation in the College*

- Classroom (3rd ed.)* Edina, MN: Interaction Book Cpmpany
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec E. J. (2002). *Circles of Learning: Cooperation in the Classroom* Edina, MN: Interaction Book Cpmpany
- Kohn, A. (1986) *No Contest: The Case Against Competition* Boston, MA: Houghton Mifflin
- 浅野 誠 (2002). 『授業のワザ一挙公開』 東京: 大月書店
- 岡部慎二 (1991). 『グループ学習の技術』 東京: 明治図書出版
- 杉江修治 他 (1998). 『学習の輪 アメリカの協同学習入門』 東京: 二瓶社
- 高橋寿夫 (2004). 「授業の改善に向けて——グループワークによるリーディング指導」『関西大学外国語教育研究』 第6号 pp.39-51
- 古宮 昇 (2004). 『大学の授業を変える』 東京: 晃洋書房